

顕浄土真実教行証文類（総序の文）

～御自釈から窺う作成の心意～

“Kyōgyōshinshō” (Introductory Sentence)

~The spirit of creation, as seen from his own interpretation~

松田 基宏*

Motohiro MATSUDA

Abstract

Shinran's "Sacred Teachings" called "Kyōgyōshinshō" is still a mysterious book for monks and researchers alike. I don't really know when it was written, when it was completed, etc. As is the case with many history books and old books, this book also has few "materials" to determine them. But there are many clues. "Shinran" is the founder of a sect with the largest followers in Japan. Currently, there are ten sects with Shinran as the founder. This is called the "Ten Schools of Shinshu". Each denomination has a unified doctrine. Of course there are features. Each sect has its own Shinran biography. But there are nuances to it. It may be because Shinran didn't talk much about himself. Few Japanese monks are as mysterious as Shinran. And even though some of them are recognized as historical facts, new theories are appearing one after another. It will continue in the future.

But you can understand Shinran. It is to listen to his own words and words, many of which have been written.

Key words: Shinran. Kyōgyōshinshō. Introductory sentence

キーワード: 親鸞、教行信証、総序の文、

はじめに

一般的（通常）には、『教行信証』との書籍名で知れているこの書は、鎌倉時代の僧侶である親鸞（1173~1262）の著作である。親鸞は、現在日本における仏教の最大教団である「浄土真宗」の宗祖であり、聖教『歎異抄』の名とともに、歴史的、社会的にも広くその存在が周知されている。しかし、『歎異抄』は彼の作ではない。現在ではほぼ定説となっている、作中にもその名が登場する唯円（1222~1289）が作者であるとされている。『歎異抄』は、この唯円の記憶をたよりに作成された親鸞生前の教えの（言行録）随聞記である。

親鸞自身、多くの著作を残している。『和讃』と呼ばれる七・五調の仏徳讃嘆の和歌約五百四十首をはじめ、今回より検証していく『教行信証』の他、『尊号真像銘文』『一念多念証文』『唯信抄文意』など数多くの著作がある。その何れもが現在の親鸞（真宗）教団にとっては、教義上重要なものであるがこの『教行信証』は真宗の根本の書であり、崇敬の念をもって、「御本典」「御本書」と呼ばれている。

『教行信証』、正式名称は『顕浄土真実教行証文類』、略して『教行信証』である。すなわち、（真実浄土往生の教え）を教行証という仏教本来の定型をもって、示していく重要な文書であるという意味である。

そのほとんどが引用文で構成されている、本書の各文類に点在する（親鸞御自釈）を根拠に、この書に潜在する作成の心意を探っていく。

*くらしき作陽大学 音楽学部 Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Music

I. 御自釈から窺う作成の心意（総序）

さて、表題のとおり（御自釈）から窺う、本書作成の意図ということだが、この書はかなり特異な形態で構成されている。本文中のほとんどが経論釈の引用である。その中、各巻のところどころには（御自釈）と呼ばれる親鸞自身の言葉で解説、感慨、補足がなされている。言わば親鸞の肉声ともいえるものである。この親鸞（自釈）、御自釈をたよりに、この書を検証していきたい。尚、（自釈・御自釈）について、自釈とは私釈の相対的な名称であり、御自釈とは宗祖としての親鸞への尊称の表現である。

その前にまずはこの書の全体像から確認していきたい。前述したとおり、この書の正式な名称は『顕浄土真実教行証文類』である。ここでいう「教行証」とは、仏教語でいうところの教法・修行・そしてその証果を意味する。すなわち、仏の教え（教）に順じ（行）、悟り（証果）を得ることを意味する。これは親鸞特有（真宗）の表現方法ではない。日蓮にも「教行証御書」があり、道元もまた「教行証」の綱格に従い自らの仏教哲理を著している。「教行証」とは、仏教者にとっての「基本綱格」の定型によったものであるともいえる。後世になって、親鸞の名とともに『教行信証』として周知されているが、これは「信」の文字ゆえに、といっても過言ではない。これは宗祖自身が本書「教文類」において、“謹んで浄土真宗を按ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり”と述べられていることを根拠としている。しかし、ここで言う「教行信証」とは著作名ではない。また、「浄土真宗」も現在言われるところの宗旨の名ではない。

ここで言う「浄土真宗」とは、法然の教えである「浄土宗」の真意のことであり、「教行信証」というのも、回向（往相）の具体的な働きの妙果の相に他ならない。ここで親鸞が「教行信証」と表現したのも、この法の「教行証」を証明するにあたり、改めて「信文類」の必要性を感じたからに他ならないだろう。

さて、その「教行信証」だが、多くの歴史書・古文書がそうであるように、撰述時期、完成の時期についても、不明な点が多い。（承元の法難）により新潟に流罪され刑期終了後の、関東常陸の国稲田在住の頃とも、帰洛後の六十代からとも言われている。（承元の法難については後述する）。それぞれ、文献学的にも根拠のある説だが、断定はされていない。しかし、親鸞九十年の生涯において、晩年まで推敲が重ねられている。

構成としては、前序（総序）といわれるものがあり、続いて「教文類」「行文類」「信文類」「証文類」「真仏土文類」「方便化身土文類」の六文類から順に成っている。そして、「信文類」の前には「別序」「化身土文類」の末尾には「後序」がそれぞれ付されている。この「序」の文は、本書において、各文類作成の意図が纏められている、御自釈である。ここからは、各巻ごとに、まず、「原文」を記入し、現代語訳、語解説、意識、考察を行っていきたい。本稿では、序文である『総序の文』を取り扱う。

撰述時期については常陸の国稲田在住の頃、高田門徒の系流をひく学者（良空）が江戸時代に著わしたもので『親鸞聖人正統伝』では、親鸞五十二歳のとき、元仁元年（1224）正月十五日より常陸の国笠間郡稲田で『全文類』を書きととのえた、とされている。この、元仁元年（1224）説が、現在でも有力視されている。

新編真宗全書 史伝編五 『親鸞聖人正統伝 巻一～六』

参照

【語句解説】

経論釈

経 釈迦の説いた「経典」

論 インドの論師が経典を解釈したもの

釈 中国・日本の祖師が経論を注釈したもの

願浄土真実教行証文類序文

愚禿釋親鸞

【原文】

竊以難思弘誓度難度海大船	无碍光明破无明闇惠日然則
淨邦縁熟調達闇世興逆害淨	業機彰釋迦韋提選 安養斯
乃權化仁齊救濟苦惱群萌世	雄悲正欲惠逆謗闡提故知圓
融至德嘉號 轉惡成德正智	難信金剛信樂除疑獲證眞理
也爾者凡少易修眞教愚鈍易	住捷徑大聖一代教無如是之
徳海捨穢忻淨迷行惑信心昏	識寡惡重障多特仰如来發遣
必歸最勝直道専奉斯行唯崇	斯信噫弘誓強縁多生叵値眞
實淨信億劫叵獲遇獲行信遠	慶宿縁若也此廻覆蔽疑網更
復逕歴曠劫誠哉攝取不捨眞	言超世希有正法聞思莫遲慮
爰愚禿釋親鸞 慶哉西蕃月	支聖典東夏日域師釋難遇今
得遇難聞已得聞敬信眞宗教	行證特知如来恩徳深斯以慶
所聞嘆所獲矣	

『浄土眞宗聖典全書 二 宗祖扁 上』(6-7 頁)

【現代語訳】

ひそかにおもんみれば、難思^{なんじ}の弘誓^{ぐぜい}は難度^{なんどかい}海^どを度^{だいせん}する大船^{むげ}、無碍^{あん}の光明^{えにち}は無明^{えにち}の闇^{えにち}を破^{えにち}する恵日^{えにち}なり。

しかればすなわち、淨邦^{じょうほう}縁熟^{えんじゆく}して、調達^{ちようたつ}（提婆達多^{だいばだつた}）、闇世^{じゃせ}（阿闍世^{あじゃせ}）をして逆害^{ぎやくがい}を興^{おこ}ぜしむ。淨業機^{じようごうき}障^{あらかわ}

れて、釈迦^{いだい}、韋提^{あんによう}をして安養^{あんによう}を選^{えら}ばしめたまへり。

これすなわち権化^{ごんけ}の仁齊^{ひとし}しく苦惱^{くのもう}の群萌^{ぐんもう}を救済^{きうさい}し、世雄^{ぜゆう}の悲^{かな}まさしく逆謗^{ぎやくぼう}闡提^{せんたい}を恵^{おほ}まんと欲^ほす。ゆゑに知

んぬ、円融至徳の嘉号は悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信楽は疑除き証を獲しむる真理なりと。

しかれば、凡小修し易き真教、愚鈍往き易き捷徑なり。大聖一代の教、この徳海にしくなし。穢を捨て淨

を欣ひ、行に迷ひ信に惑ひ、心昏く識寡なく、悪重く障多きもの、ことに如来（釈尊）の発遣を仰ぎ、

かならず最勝の直道に帰して、もっぱらこの行に奉へ、ただこの信を崇めよ。ああ、弘誓の強縁、多生に

も値ひがたく、真実の淨信、憶劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。もしまたこのた

び疑網に覆蔽せられれば、かへってまた曠劫を経歴せん。誠なるかな、摂取不捨の真言、超世希有の正法、

聞思して遅慮することなかれ。

ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏（中国）・日域（日本）の師釈に、遇ひがた

くしていま遇ふことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。

真宗の教行証を敬信して、ことに如来の恩徳の深きことを知んぬ。ここをもって聞くところを慶び、獲る

ところを嘆ずるなりと。

『顕浄土真実教行証文類 序』（浄土真宗聖典 本願寺出版）

(131-132 頁)

【語解説】

- | | |
|--------------|-------------------------------|
| ・ ひそかにおもんみれば | 仏の心に対してへりくだる意。こころ静かに思いをいただくと。 |
| ・ 難思の弘誓 | 思いはかることのできない広大な誓願。 |
| ・ 難度海 | 渡ることが難しい迷いの海。 |
| ・ 恵日 | 智恵（智慧）の太陽。 |
| ・ 浄邦縁熟して | 釈尊が浄土の教えを説き明かす機縁が熟して。 |
| ・ 調達 | 提婆達多 |
| ・ 闍世 | 阿闍世王子 |
| ・ 淨業機障 | 業が起こり、淨らかになる時。 |
| ・ 逆謗闡提 | 仏法を信じず、仏縁をもたないもの。 |
| ・ 世雄 | 仏の尊称。 |
| ・ 円融至徳の嘉號 | 何一つかけたものがない、最高の徳を具えた弥陀の名号。 |
| ・ 難信金剛の信楽 | 自力の信では得れない、堅固な信心。 |
| ・ 凡小 | 愚かな凡夫。 |
| ・ 捷徑 | 近道。 |
| ・ 大聖一代の教 | 釈尊が一生の間に説いた教法。 |

- ・ しくなし およぶものはない。
- ・ 発遣 浄土往生を勧めること。
- ・ 多生にも値ひがたく いくたび生を重ねても容易にあえるものではない。
- ・ 億劫 限りなく長い時間。
- ・ 疑網に覆蔽せられれば 疑いの網におおわれたなら。
- ・ 経歴 流転を繰り返すこと。
- ・ 聞思して 本願のいわれを聞きひらき、疑いためらってはならない。
- ・ 西蕃月支 月支→中央アジアの民族名。ここではインドのこと。

『顕浄土真実教行証文類 序』（浄土真宗聖典 本願寺出版）

（131-132 頁）

この、「総序の文」は、単に教文類（巻）以降の総合的な「序文」というだけではない。本書そのものの、未だ浮き彫りにされざる（断定されていない）作成の目的、意図に呼応された御自釈である。本書全体を通して見ると、作者（親鸞）自身は文面の裏側に身を隠しながらも、彼の発揮（己証）は引用文の中に生き活きと、その姿を現わしている。「総序」は「後序（化身土文類末）」へと呼応しながら、その思想的な根拠の繋がりを確認しうるものであろう。

【意訳】

（こころひそかに考えると）今、心微妙^{しんみみょう}の境に至りて、念^{おもいしず}静かに、「本願^{しょうい}の正意」を受け入れるにあたり、この広大無辺の念願^{しやうじるとん}の力は、生死流転に流され、絶望と再生、悲嘆と歓喜に翻弄される我ら「人界^{にんがい}」にありしもの、この救われ難き我らをして寂^{じゃく}静^{じやう}なる安逸の地へと誘う無上の智慧光^{いざな ちえこう}、ゆえに、浄土往生（無碍なる世界への誕生）の縁は熟し、提婆達多^{だいばだつた}が阿闍世王子^{あじゃせ}をそそのかし、父頻婆娑羅王^{ひんばしやら}を殺し母を幽閉した事件は出現した。だからこそ、将に今こそが浄業^{じやうごう}の機縁が熟した時であり、釈尊は阿闍世の母である韋提希夫人の自身救済の訴えに対して、数ある仏国^{ぶつこく}の中から（浄土）を選ばしめさせたこの一連の事件（出来事）を洞察するにあたり、登場人物のだれしもが、すなわち提婆も阿闍世も殺害された王も韋提希もすべての者^{えんゆう}たちが「円融至徳^{えんゆう しかく}の嘉號^{かごう}」出現（名告り）のために、化現した姿であり、三世（過去・現在・未来）において、永遠に迷いの中から救われることのない、苦悩の我ら衆生^{しゆじやう}を救済するための仮の出来事であったのだ。またそれは、仏の教えを謗り、仏と成るべき因をもたないもの「闍提^{せんたい}」に救済の手を差し向けるものであった。だからこそ、この何ものも不足したものない「仏の御名^{みな}」は我が身に内在する、悪しき、

智慧無き正体を廻せして、「徳」へと変換させる、正しい仏智^{ぶつち}の働き、信じることが困難なゆえの「真実信」に満たされた「深信^{じんしん}」は「信樂^{しんぎょう}」ゆえに、疑惑を取り除き「証^{さとり}」を自覚できうる真理である。だからこそ、何一つ取り柄のない、私と同じ愚かなるもの（罪惡深重^{ざいあくじんじゅう}・煩惱熾盛^{ぼんのうしじょう}の凡夫）しかし、愚かなるものであるがゆえに、修めることが容易^{たやす}く出来うる「真の教え」であり、往生することがた易い近道であるのだ。大聖（釈尊）が生涯にわたって説かれた「教法」も、この、広大な弘誓^{ぐぜい}の徳海に等しいものでさえないのだ。迷い苦悩のこの世を捨て去り、安樂なる「涅槃^{ねはん}」の世界を求めながらも、其のための行がわからず、正しく定まった思いを持つことが出来ない。正しい智慧が生ぜず、思いは聡慧^{そうけい}でなく昏く^{くら}、はからい（さわり）が多いものたち、特に二尊（如来^{にょらい}・釈尊^{しゃくそん}）によって差し向けられた、（最も優れた近道）に帰入して、ひたすら、この行（称名^{ゆだ}）に委ね、唯この信を深く保ちなさい。ああ、しかし今思えば、この逃げることをも許されない「強い救いの働き」、何度生まれ変わっても、もはや二度と出逢^{であ}うことは難しいだろう。真の純粋な信心^{しんじん}を再び獲ることは出来ない。その獲がたき「信心」を、既に獲ていることを覚った（気づいた）ならば、はるか過去からのお育ての縁を尊びたい。もしも、心迷い、疑いの霧^{きり}に覆われてしまったなら、また再び^{ふたたび}（かつての様に）、救い無き無明^{むみょう}の闇をさ迷わなければならなくなるであろう。まことである、まことである。「摂め取って決して捨てない」との真実のことば。時代を超えても変わらない、稀なる正しい法^{ほう}であるのだ。ためらってはいけない。

ここに、愚禿^{ぐとく}釈親鸞（愚かではあるが、愚かさに徹して仏道を歩む、仏弟子親鸞）。中国・日本の聖典・祖師^{そし}がた。本来なら、出逢うことが難しかったであろうが、出逢えることが出来た。その教えも本来なら知ることが難しかったであろうが、知るべき縁^{えん}を獲ることが出来た。この、浄土^{きょうぼう}の教法の「教・行・証」を敬い信じるがすでにかなっている。

この「如来^{おんとく}の恩徳」の深淵なることを、うれしく有難く思い、獲たことを讃嘆^{さんたん}するのみである。

（意訳 筆者）

ここまでが所謂「総序の文・前序」の原文・現代語訳・語解説・意訳である。

この「文類」が、本著作の中で、いかなる位置にあり、作成動機を意図する根拠を持つのかをこれから後、順に考察していきたい。そもそものが、今回のテーマは親鸞自釈をたよりに、本書の作成動機を考究し

ていくことにある。作成順とされる「教文類→行文類→信文類→証文類→真仏土文類→化身土文類」に従いながら、作業を進めていきたい。本書は文献学としての研究においては、未だ断定しきれない問題は多々含まれている。

撰述時期、完成時期、撰述の順、資料収集の手段など多くの疑問が解消されないままである。昭和二十七年に結城令聞氏（1902～1992）によって主張された、「信巻別撰説」なども、一応の決着はついているものの、全否定はされないままであるとのことである。ゆえに、本来は文献の諸問題が解決しきれないうちは、部分から全体を推察するということも、実際には困難なことだとも考えられる。

しかし、本書は真宗教団においては信徒にとっても、『聖典・本典』として取り扱われている「宗教書」である。手順に沿いながら考究していく中から、現在、未解決の諸問題も自ら、別視点において推察可能なことがあると考えられる。（感じている）

繰り返すが、本書中では長文である御自釈「総序の文」も、今後考究していく「各文類」での引用文（経・論・釈）の引用理由の意図との繋がり、呼応関係を論じれるものである。今回の「総序」においての以下の【考察】は、「教文類」以下の六文類の構成・内容の全体像を理解する上での必須項目であると考ええる。

※本稿での考察とはそうした意味（意図）である。

【考察】（以下が本稿の考察対象の内容である。）

まず、ここには宗教者としての親鸞の内信の表明ともとれる感嘆が著されている。それは親鸞面受の弟子（一般的には唯円）の著作と言われている『歎異抄』の書き出しが、「ひそかに愚案をめぐらして、ほぼ古今を勘ふるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑あることを思ふ。幸いに有縁の知識に依らずば、いかでか易行の一門に入ることを得んや。全く自見の覚悟を以って他力の宗旨を乱ることなけれ。よって、故親鸞聖人の御物語のおもむき、耳の底に留まる所いささかこれをしるす。ひとへに同心行者の不審を散ぜんがためなりと。云々」（真宗聖典 島地）545 頁と始まり、これは本書『総序』への呼応がある。当然と言えば当然なのだが、本書を撰述するにあたって、真宗遇法の感慨から始まる。ここにおいて、貫かれているのは「広大なる弘誓の力」への讃嘆以外はない。本来なら、いかなる教を学び、行じて救われることが難しい我が身において、此岸（迷いの世界）から彼岸（自覚の世界）へと渡らしてくれる巨大な船との思い。

それはまた、如何なる障りにおいても「遮られることがない」との自覚。これは仏智の働きであり、本願の働きである。これを「他力」といい「本願力」という。真宗の教えの要はここにある。

また「無明」とは、われわれ人間に生存と死を与え、輪廻させしむ「業」の根源、カオス的な混沌、智慧もなく、ものごとの道理がわからない迷いの状態である。それゆえ、「心昏く、悪多く、障り多きもの」となる。「仏教」それ自体は、本来「自覚の教え」「智慧の宗教」である。しかしその能力においても、自分の力ではとうてい、自覚も智慧も生じえないもの、親鸞はそれを「凡小・愚鈍」と呼んだ。しかし、自身を外に置いて、そのような者たちがいるわけではない。それは、親鸞自身のことであり、自身の内に観じる「同じく救われ難き衆生」のことであった。

Ⅱ.親鸞

ならば、ここにおいて、われわれは、親鸞そのひとの求道のあゆみ、軌跡を知っておかなければならない。親鸞は承安三年（1173年）京都伏見の日野の里に貴族の長男として生を受けた。平家が壇之浦にいて滅亡（1185年）する、およそ十年前の動乱の世の時代である。幼名を松若丸という。母吉光女が懐妊された時、金色の光明が口の中に入り、袈裟を纏った聖僧が、幼名を付けよ、と五葉の松を授けられたという真宗高田派に伝わる伝説（五葉の松伝説）、からその名が付けられたという。

親鸞八歳の時、この母が亡くなる。また、九歳の時には父日野有範も隠遁したらしく、この時すでに、世の無常なるを感じ、出家得度したという。「生死出づべき道を、解決すべく」ということであろう。

そうして九歳の三月十五日に、叔父（父の兄）に連れられ、比叡山栗田口の青蓮院に慈円を師として、得度出家したと言われている。

十五歳～十八歳までは、京都仁和寺、奈良法隆寺に学び、比叡山根本中堂では、千日座禅観念なども行っている。あるいは、常行三昧、堂においての観仏行なども体験している。

天台の規定『山家学生式』に従い、十九才の頃までは、ひたむきな天台教学の修学がなされた。しかし、この行中にあっても煩惱（食欲・瞋恚・愚痴）の三毒は、親鸞の心中を乱すのみであった。「生死の解決」といっても、それは人間誰しもが抱えている問題である。「死」の解決といっても、それは死への恐れ、未知の領域への不安といったものでもあろう。

大乘仏教の根底にもある「輪廻観」は、教義としては存在していても、それは思惟の外の領域である。それに加えて、若者なら誰しもが直面する「性」への悩み。現代の我々と同じ問題に直面し、煩悶していた。「生死」の問題、といっても畢竟それは、生存の問題である。「死」の問題といっても、それは「生」の問題の範疇である。若き親鸞は解決しがたい苦悩の渦中にあつたのだ。

十九才になった親鸞が、法然門下に入室するに至るまでの十年の間に、その後の親鸞思想形成の特質を理解する上で重要と思える出来事があつた。建長二年（1250 年）に親鸞が末娘覚信尼に与えたとされる、（真宗高田派）本山専修寺に伝えられる文書『三夢記』（建長二年文書、三夢記）に記されている。所謂、（夢中の教導）とも受け取れる内容である。

建久二年（1191 年）親鸞十九歳の九月十四日、聖徳太子廟での夢告だが『親鸞聖人正明伝』によると、親鸞十九歳の時法隆寺で因明（インド論理学）を学んだ後、川内国磯長（大阪）の聖徳太子御廟へ参詣の時、次のような夢告を受けたとされている。これが、最初の夢告とされる。

「親鸞三夢告」

「第一の夢告」

我三尊化塵沙界 （我が三尊^{さんぞん}は塵沙^{じんじゃかい}界^けを化す）

日域大乘相応地 （日域^{じちいき}は大乗^{だいじょう}相応^{そうおう}の地なり）

諦聴諦聴我教令 （諦^{あきら}に聴^かけ 諦^{あきら}に聴^かけ我が教^{きょう}令^{れい}を）

汝命根^{みようこん}應^{まさ}に十余歳なるべし）

命終速^{すみやか}入清浄土^{しょうじょうど} （命終わりて速^{すみやか}に清浄土^{しょうじょうど}に入らん）

善信善信真菩薩 （善^よく信^よぜよ善^よく信^よぜよ真^まの菩薩^{ぼさつ}を）

【現代語訳】

「阿弥陀如来と観音・勢至菩薩が迷いに満ちた人間界を教化してくださる。日本は大乘仏教が弘まるのにふさわしい土地である。よく聞きなさい、わたしが教えるところを。おまえの寿命はあと十年しかないのだ。しかし、寿命が終われば直ちに弥陀の浄土に生れるだろう。よく信じなさい、よく信じなさい。おまえが真に菩薩になるということ。」

この夢告は（和国の教主）ともいえる、聖徳太子が親鸞に、余命はあと十年であることを告げたものであると言われている。

「第二の夢告」

第一の夢告を受けてからはや十年が経とうとしていた、親鸞二十八歳の冬のことである。これも『正明伝』によると、予告の十年を目前にひかえて、何ら解決できず心穏やかにならないままに、延暦寺東塔の無動寺大乘院で二十一日に渡る参籠を行う。吉願の前夜、再び如意輪観音（聖徳太子）が現れ

「汝の所願^{しょうがん}まさに満足せんとす。我が願^{がん}もまた満足す。」

【現代語訳】

「お前の、後生の一大事の解決する日は、近づいてきた。絶望することなく、求めよ。その時、私の任務もおわるであろう。との夢告を受けた。これを、大乘院夢告という。念願達成が間近なことを予告する、第二の夢告である。」

「第三の夢告」―六角堂夢告―

建仁元年（1201年）正月より、親鸞は京都にある頂法寺（通称六角堂）に百日間の参籠を決意する。堂が六角であることからこの名で呼ばれているが、用明天皇二年（587年）に聖徳太子によって創建された寺院であり、ここには如意輪観音が安置されている。九十五日目の寅の刻（午前四時頃）夢中に救世観音が白蓮の華に端座して、告げた。

『女犯偈』（によぼんげ）

行者宿報^{しゆくほう}設女犯^{せつによぼん}（行者が宿業^{しゆくごう}によって女犯^{によぼん}の罪を犯すというなら）

我成玉女身被犯^{がじょうぎよくによしんびはん}（私が玉の様に美しい女性となり）

一生之間能莊嚴^{いっしょうしけんのうしょうごん}（一生涯において、添い遂げましょう）

臨終引導生極樂^{りんじゅういんどうしやうごくらく}（そして、臨終の時には、極樂（浄土）へと導きましょう。）

そしてさらに、「これは私の誓願である。一切の群生に、このことを説き聞かせなさい。」と告げた。

【現代語訳】

仏道修行者が、前世からの宿報（宿業）によって、（女犯の罪を犯し）、女性を妻とすることがあっても、それはわたしが女性（によしょう）の姿となって、添い遂げ護っている姿なのだ。そして臨終には手を取り極樂（浄土）へと導きましょう。

この偈文の意図することを深く理解し、衆生（生きとしいけるもの）に私の願いを伝えるのだ。そう告げたのだった。

新編真宗全書 史伝編五 『親鸞聖人正明伝 卷一～三上下』

『親鸞聖人正明伝 卷四』

新編真宗全書 史伝編五 『親鸞聖人正統伝 卷一～六』

新編真宗全書 史伝編五『親鸞聖人正明伝 建長二年文書（三夢記）卷一上二上』

末本文美士『親鸞』65-67頁

参照

この「六角堂夢告」と呼ばれる、三度目の夢告の真意に領いた親鸞は、かねてより噂を耳にしていた、

吉水の草庵において専修念仏を説く「法然」のもとを訪れるに至るのである。この夢告と親鸞の法然門下への入門の関連性を考えてみた時、疑問の余地も残るとも言われているが、この『行者宿報偈』とも言われている第三の夢告故に、親鸞は自他ともに救われるべき、「一切衆生往生」の道を確信したのであろう。

Ⅲ.承元の法難（建永の法難）

その頃法然は比叡山において、二十年間の修行を終えた後、山を降り、当時京都東山吉水に草庵を開き、専修念仏の教えを広めていた、比叡山の先哲「法然」の門下に入る。法然のもとには、多くの人々が救いを求めて集まっていた。「雑行を棄てて、本願に帰した」親鸞は、元久二年（1205年）四月入門五年の頃、法然の著作『選択本願念仏集』を書写することを許され（選択相伝）、同年七月には法然の御影を製作することを許され、讃銘を受けた。法然が説く、専修念仏の教えは人々に受け入れられ、門弟も増えていった。その中には撰閑家の九条兼実もいた。

専修念仏の教えが広まるにつれ、その発展を阻止するため、比叡山・奈良の興福寺の僧侶たちは法然教団に弾圧を加えてきた。しばしばの弾圧をも法然は回避を続けていた。

建永元年（1206年）、興福寺はついに、専修念仏の停止と法然およびその門下の流罪を朝廷に訴えた。そのようななか、後鳥羽上皇、熊野参詣のため京都留守中に、法然門下の安楽、住連らが東山麓鹿ヶ谷において、念仏修行を行ったところ、院の女房（女官）がこれに参詣して宿泊するということが起こった。このことにより、後鳥羽上皇は、法然教団への処罰を決めた。

安楽・住連ら四名は死罪。法然と弟子七名は流罪となった。法然・親鸞らは僧籍を剥奪され、法然は「藤井元彦」、親鸞は「藤井善信」の俗名を与えられた。法然は土佐国番田（実際は讃岐国、現香川県）へ、親鸞は越後国国府（現新潟県上越市）に流罪が決まった。この時より親鸞は愚禿釋を姓とする。「愚禿釋親鸞」—非僧非俗—（僧に非ず俗に非ず）を自己の求道の根拠となした、親鸞の自覚の名告りである。

この一連の出来事は真宗史においては、承元元年・建永二年（1207年）承元の法難（建永の法難）とも認知されていることである。歴史的には不明な点もいくつかあるとのことだが、ここは通説に従う。この出来事に対する親鸞の、怨みとも呻きとも受け取れる念いは、後に著すことになる『化身土文類後序』に率直に表現されている。しかして、尚「もっぱらこの行に奉へ、ただこの信を崇めよ」と親鸞は訴えてきているのだ。

Ⅳ.王舎城の悲劇

さて、総序本文中にある、「調達（提婆達多）、闍世（阿闍世）をしてから逆謗闍堤を恵まんと欲す。」だが、序文中最も重要な箇所である。紀元前五世紀頃、ガンジス川支流に出現し、次第に大国に併合されて、壮大なる都市国家が建設されていった。コーサラ・マガダ・アヴァンティ・ヴァンサの四国が有力になっていった。これは、釈尊在世中にそのマガダ国で実際に起こった、ある事件をもとに説かれている。「仏教諸文献」では、真宗においても特に「王舎城の悲劇」として広く知られた逸話である。ここで親鸞があえてこの物語を挿入したのは、浄土（真宗）正依の經典である浄土三部經（仏説大無量寿經・仏説觀無量寿經・仏説阿弥陀經）中、「仏説觀無量寿經」において、この「王舎城」は取り上げられ、浄土教（念仏往生）生起の起因として捉えられているからである。

「觀無量寿經」は「無量寿仏觀經」ともいい、略して『觀經』ともいわれる。先述したように、釈尊在世当時、王舎城でおこった事件を契機として説かれたものが「序文」に示されている。

悪友の提婆達多にそそのかされた阿闍世太子が、父頻婆娑羅王を幽閉し、その王のために食物を運んだ母の韋提希夫人をも宮殿の奥に閉じ込める。

夫人はかねてから帰依していた耆闍崛山におられる釈尊に思いを馳せ、仏弟子を遣わし説法するよう願う。「觀無量寿經」では、この「王舎城物語」における、主人公ともいえる、王妃韋提希の願いによって、浄土往生のための起因が「他力念仏」一行にあることが説かれる。

ここでは、この「王舎城物語」について、簡略に説明し、「王舎城經典」についても若干の説明を加えておきたい。この「王舎城物語」には、実は多くの（主人公）が登場する。それだけ、多種の関連經典が存在するということだが、（釈迦、頻婆娑羅王、阿闍世、韋提希）それにももちろん（提婆達多、仏弟子）も重要な登場人物である。經典における主人公となると（頻婆娑羅王、阿闍世、韋提希）と絞られてはくることが、原始經典の『沙門果經』、『未生怨經』、『大乘涅槃經』、『觀無量壽經』など小乗・大乘によらずその他多くの經典に類似の物語が説かれている。それぞれが別種の考察対象となるべきものもあるが、ここでは『大乘涅槃經』の物語を根底に見据えた、『觀無量壽經』を中心に（王舎城）の解説を進めたい。

まず、『觀無量壽經』以下「觀經」―は阿闍世の母、頻婆娑羅王の妃（韋提希夫人）が主人公である。息子である、阿闍世王は提婆達多に唆され、父頻婆娑羅王を幽閉し、死に至らしめようとする。幽閉され食事もうろくに与えられなかった頻婆娑羅王を救わんと妃韋提希は自らの身体に麝蜜をぬり、瓔珞の中に漿を入れ、毎日王のもとへそれを施した。王はそれを食べ、飲料を飲み、合掌して牛車借山に向かって釈尊に向かい礼拝した。釈尊は、王の親友である大目犍連を遣わせ八戒を授け富楼那は説法を行った。阿闍世が門番に父王の生存を問うたところ、韋提希が麦粉を身体に塗り、装身具に飲料を入れ目連・富楼那が王を訪れ戒を授けていることを知る。阿闍世は激怒し、母韋提希や釈迦弟子のことを罵り、刀を抜き母を殺そうとする。大臣の耆婆と月光は、ともにこれを諫める。しかし、阿闍世は母韋提希を幽閉する。阿闍世にとって父頻婆娑羅王は悪人であり、それに加担する母もまた悪人であり、釈尊も仏弟子も皆、悪人であった。しかたなく、幽閉された韋提希は、憔悴し心は昏く深い落胆の淵にあった。

耆闍崛山に向かって礼拝して、釈尊に救いを乞う。釈尊は阿難（アーナンダ）に命じて、阿難、目連らと神通力をもって、空中から幽閉されている韋提希のもとへ降り立つ。

礼拝を終えた韋提希が頭を上げると、そこに釈尊、阿難、目連の姿を見出す。韋提希は自らの装身具を引きちぎり、全身を床上に投げ出し号泣する。そして、眼前の釈尊に向かい、自分はいかなる罪のためにあのような子を産んだのか、釈尊はなぜ提婆達多と親戚なのか、理不尽なる問を吐露する。

（釈尊と提婆達多は従兄弟関係、仏弟子阿難も釈尊の従兄弟であり提婆と阿難は兄弟であると言われている。）

『仏説觀無量壽經』浄土真宗聖典 本願寺出版 87-118 頁

『佛説觀無量壽經』聖典 浄土真宗 島地聖典 79-108 頁

参照

この韋提希のこうした愚痴心は『觀經』でのみ表現されており、他經典では見受けられない。

韋提希自身は、王妃であり教養・知性も兼ね備えた女性である。しかし、ここにおいては、抑えることの出来ない、現実生活から直面せざるを得なかった「業苦」の中での、一介の凡夫の姿を現わさずにはおれなかった。ここから、釈尊によって夫人救済のための觀法が説かれるのであるが、本稿においては、『觀經』それ自体の考察が主旨ではないので、正宗分の定善觀法十三觀、及び散善三福、顕彰隱密の經意等においては、次機会に譲る。（今回は王舎城概要説明のみが目的である）

ここでは、『觀經』が凡夫往生発起の經典であり、衆生救済の根拠を発端とした、經典であるかを示すのである。

さて、『觀經 王舎城』にいたる、経緯だが詳しくは、大乘の『大般涅槃經』に説かれている。

その『涅槃經』だが、そもそも『涅槃經』とは、釈尊の入滅を叙述し、その意義を説く經典類の総称であり、小乗（阿含經典）から大乘經典まで、数種類が存在する。ここで関連する涅槃經とは、四世紀頃に成立したといわれている、「大乘の涅槃經」のことである。「色身」としての釈迦入滅後、「法身」としての釈尊は、今現在も説法をおこなっているとする立場である。この大乘の涅槃經は『大般泥洹經』6 卷 {法頭・仏陀跋陀羅訳}、『大般涅槃經』40 卷 {北本・大本} 曇無讖、『大般涅槃經』36 卷（南本）（慧嚴・慧観・謝靈運）により校合訂正の經典と三種ある。

『教行信証』の引文は北本・南本の位置が示されていることから、この『大本涅槃』に拠るものと考えら

れている。この『涅槃經』から『觀經 王舎城』至るまでの「阿闍世物語」（阿闍世が父王を死に至らしめた、いきさつが『信卷』には引用されている。『觀經 王舎城』とはこの『涅槃經 王舎城』を周知のものとした上で成り立った、「終樂章」であるともいえるだろう。

尚これは、「逆謗摂取の釈」（信文類）だが、この釈の始めに次のような御自釈がある。

【原文】

誠知、悲哉、愚禿鸞、沈没於愛欲廣海、迷惑於名利太山、
不喜入定聚之數、不快近眞證之證、可恥可傷矣。

（浄土眞宗聖典全書 二 宗祖扁 上）（105 頁）

（聖典 浄土眞宗）島地大等（271 頁）

【現代語訳】

「まことに知んぬ、悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ること
を喜ばず、眞証の証にちかづくことを快しまざることを、恥ずべし傷むべしと。」

『浄土眞宗聖典 本願寺出版』266 頁

【語解説】

- ・逆謗 （仏教でいう）五逆の罪を犯した者。五逆（殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出身仏血）
- ・摂取 仏の智慧光が迷いの衆生を救いとること
- ・迷惑 あてどなく迷い戸惑うこと
- ・定聚 仏の悟りを得ることが定まっている
- ・眞証の証 間違いのない眞実の悟り

『仏説観無量寿經 浄土眞宗聖典（本願寺出版）』266—267 頁

『仏説観無量寿經 聖典 浄土眞宗（明治書院）』79—108 頁

『浄土眞宗聖典 本願寺出版』267 頁

永原智行『阿闍世のすべて（法蔵館）』149 — 165 頁

参照

【意識】

ああ、今自身を省みると、深い悲嘆の念に沈まずにはおれない。「海」とは、広大なる智慧を呼び覚ます源であると同時に、一度「煩惱の嵐」が吹きすさぶや、濁り、波は狂ったように荒れ、私をその中に飲み込んでしまうのだ。未だ、五欲に迷い、「眞実の覚り」を得、浄土（生死の境を越えた高次の領域）、すなわち「涅槃」に生れることをよしとは、思えないのだ。恥ずかしいことだ、痛ましいことなのだ。

（意識 筆者）

これは、親鸞自身が逆謗の身であり、一闡提であるとの、深い内省であり、懺悔の明でもある。

『教行証信』全文類（巻）の根底にある、否（親鸞思想）の根底にある、ひとつの確信「^{せんだい}闡提の救い」。すなわち「^{むこん}無根の^{しん}信」の救済の証明にほかならない。これはまた『信文類（巻）』での考究対象として、次稿にゆずる。『観経』との関連が深い御自釈のため、ここに先に記した。『王舎城物語』における（^{あじやせ}阿闍世王子）にみる「^{いんねんしょうき}因縁生起の物語」もまた、「^{ごんけ}権化の^{にん}任」のひとつの相にすぎないのだ。

おわりに

さて、本稿での論説の意図するところは、親鸞御自釈（今回は総序の文）から窺う『顕浄土真実教行証文類』作成の意図ということだが、本書は真宗門徒・信徒及び僧籍者以外の方にとっては、馴染みの薄い「聖教」（しょうぎょう）であると考え。尚ここで言う“窺う”とは、考究と同義語である。まず書物自体への基礎知識を認識していくためにも、重要と思われる引用文、挿入文を簡略に確認していった。ここでは、『総序の文』中の、特筆事項であると思われる『作者親鸞』、『王舎城物語』、『観無量寿経』などについて、本文理解のための補足説明を行った。この書の編集形態の或る種の特殊性のために必要なことであると考えた。『親鸞三夢記』なども、多様な理解が可能であるが、当時の、中世の仏教者（僧侶）である親鸞の（自己内省による自性の具体的な表現）と捉えれば、後の親鸞理解の上でも、おおいに参考になるのではないかと考える。諸説ある中で、仮にこれらが後世の創作（伝承）の類であったとしても、その発祥の源が親鸞著作の他著作の中に根拠となりうるものが存在することで、それらは親鸞思想解明に直接繋がるものと考えられる。

『三夢記』『王舎城』『観経』、おのおのそれ自体で、一つの考究対象となる題材であり、従来より多くの研究者、僧籍者に扱われているものである。ここには、文献学、書誌学といった立場の範疇からのみでは、もてあまさざるを得ない「課題」が含まれている。しかし、それは「大乘仏教」本来の可能性の奥行きとも言えるものだが、本稿においては対象としない。

『三夢記』については、「第一夢」「第二夢」については、伝承の範囲であるとされているが、そうであるならば、信憑性が高いとされている「第三夢」についても、同様ではないかと考える。「夢」にまつわる逸話は、親鸞のみならず、他の仏教者にも数多く存在する。また、「三夢」以外にも、親鸞の生涯において「夢」は慎重に取り扱いたいサジェスション（suggestion）であるとも推察できる。

『王舎城』についても、物語としては広く知られたものだが、この物語（事件自体は実話であるとされているが）、を起点としながら、頻婆娑羅王、韋提希夫人、阿闍世、を中心とした全く別の『王舎城』が誕生する。ここには、仏教以前のインド文化から踏襲したもの、「業」「輪廻」といった考え方の背景、あるいは後の浄土宗に影響をあたえる「悪人成仏」「転悪成善」「無根の信」といった、親鸞思想において重要な根拠が示されていると考える。

本稿に続く（次稿）では、本書を編集順に『教文類』の考察をする予定である。本稿においては、詳細な説明を省略したものも、今後は更に詳説していく。

『顕浄土真実教行証文類』を親鸞御自釈が示す各文類に引用されている、（経論釈）から考究する作業を詳密に行うことにより、本書作成の心意が解明されると推察する。

参考文献

合群信哉 『教行信証』を読む （角川学芸出版、2010年）8-22頁

五十嵐明宝『王舎城の悲劇と救い』（彌生書房刊、1989年）13-40 頁、 78-107 頁

金子大栄 『教行信証 口語訳』（法蔵館、1988年）3－14 頁

末木文美士『親鸞』（ミネルヴァ書房、 2016）49－68 頁

杉岡孝紀 『親鸞の解釈と方法』（法蔵巻、2011年）57－78 頁

平雅行 『歴史のなかにみる親鸞』（法蔵館、2021年） 第1章 9－75 頁
第3章 110－143 頁

千葉乗隆 『親鸞 人間性の発見』（清水書院、2021年）110－143 頁

永原友行 『阿闍世のすべて』（法蔵館、2014年）149－165 頁、103-147 頁

深川倫雄 『親鸞聖人 教行信証御自釈』（永田文昌堂、2011年）1－3 頁

『浄土真宗聖典 顕浄土真実教行証文類 現代語版』（本願寺出版、2011年）131－132 頁

新編真宗刊行会 新編真宗全書（思文閣、1976年）291－324 頁、325－415 頁

真宗教団連合 『釈尊と親鸞—インドから日本の軌跡—』（法蔵館、 2011 年）第2 章

『真宗 新辞典』真宗新辞典編集会（法蔵館、1983 年）

『親鸞辞典』（柏書房、2006年）2－76 頁

『浄土真宗聖典 第二版』（本願寺出版、2019年）

『聖典 浄土真宗』島地大等編集（明治書店、1981年）